

## 牧師室から(2023.1.8)

元旦の一つの楽しみは、送られてきた年賀状を読むことである。

年末忙しい中、年賀状がなければいかに楽かと思ったことがあるのにもかかわらず、友人や知人から送られてきた年賀状を見るのはとても楽しい時間である。絵の横に簡単な新年のお祝いの言葉だけであっても、一年一回の年賀状を通して、まだ元気そうだな、私を忘れていないんだな、といろいろな思い出を浮かべながら心が温かくなる。また、一年の出来事を詳しく書いてくれる方もいて、度々の連絡はなかったとしても、身近に感じられる。

しかし、この頃身内を亡くされて年賀状を遠慮するという葉書をもらったり、高齢で「これで年賀状を最後にします」と伝えてくる方も多くなっている。

私どもが東北にいる時や大阪にいる時に、遠いところまで訪ねてくれて、何日かを共に過ごした方々の中にも召天された方や、認知症になって家族が代わって対応する方もあり、時の流れを感じ、寂しくなる。

神学について、そして、キリスト者としてどのように生きるべきかと夜通し語り合ったその日の情熱も、共に旅行をしながら楽しんでいた賑やかさも、この頃は遠いある日の記憶になってしまった。

今は、その記憶を大事にしながら静かに過ごしたいと思うのは、もう私も年取ったのか、あるいは、ただの疲れであるのか。コロナのせいであるのか。

年賀状を前にして、過去に向かうタイムマシンに暫く乗っているような気持ちになっている。新年を迎え、新しい歩みを確かめるため、通らなければならないひとときであるのかもしれない。

詩篇記者は言っている。「…瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります。(詩編 90: 10 d)」。そして、続いてこのように祈っている。「生涯の日を正しく数えるようにしてください。知恵ある心を得ることが出来ますように。(詩編 90: 12)」

この祈りこそ、今の私の祈りである。

(鈴木善姫牧師)

追記。

喪中の人が年賀状を出さないという日本独特の習慣は、明治・大正・昭和期に天皇が亡くなられた時、年賀欠礼を行っていた習慣からだと言われている。そして、悲しみの中にいる人に新年のお祝いの年賀状はふさわしくないという意味もあるようである。しかし、キリスト者にとって、死は神様の御旨によって天国に召されているということから、そのような習慣を気にする必要はないのではないかと思う。